

# 共同研究の経過と概要

平川 南

## 【目的】

この研究の目的は、自然環境の恵みと脅威が人間生活にどのような影響を与えてきたか、また人間が環境の改変を通じてどのような環境問題に直面し、歴史的に対処してきたかなど、日本列島における自然環境と人間生活との関係をめぐる歴史を総合的に明らかにしようとするところにある。

本研究では、遷移や気候変化による植生の変動およびそれに伴う動物相の変化や火山爆発・洪水といった災害などに、人間が生活を通じてどのように対処してきたかを明らかにする。また人間が環境の改変を通じて自ら作り出した生業の変化、資源問題、人口問題、さらに都市における火災・疫病・廃棄物などの開発に伴う様々な環境問題について日本歴史の中で検討を加えることとする。

## 共同研究員

氏名	所属・職		専門分野・分担課題
平川 南	本館歴史研究部	教授	研究代表者・古代史
小野 正敏	〃 考古研究部	助教授	考古学
西本 豊弘	〃 考古研究部	助教授	考古学
篠原 徹	〃 民俗研究部	教授	民俗学
小林 忠雄	〃 民俗研究部	助教授	民俗学
辻 誠一郎	〃 歴史研究部	助教授	環境史学
坂本 稔	〃 情報資料研究部	助手	地球化学
西山 良平	京都大学総合人間学部	助教授	古代史
義江 彰夫	東京大学大学院総合文化研究科	教授	古代・中世史
原田 信男	札幌大学女子短期大学部	教授	中世史
笹本 正治	信州大学人文学部	教授	中世・近世史
北原 糸子	東洋大学社会学部	非常勤講師	近世史
林 謙作	北海道大学文学部	教授	考古学
寒川 旭	通産省工業技術院地質調査所	地域地質研究官	地震考古学
金田 章裕	京都大学大学院文学研究科	教授	歴史地理学
南木 睦彦	流通科学大学商学部	助教授	植物学
金原 正明	天理大学附属天理参考館	学芸員	環境史
高木 勇夫*	慶應義塾大学経済学部	教授	地理学
計 17 名	(内部 6 名・外部 11 名)		所属名は 1995 年度現在 * = 1996 年より新規

---

### 研究協力者

#### 1995年度

市川 健夫 長野県立歴史館  
臼居 直之 (助)長野県埋蔵文化財センター  
佐藤 信之 更埴市教育委員会  
高木 勇夫 慶應義塾大学経済学部  
寺内 隆夫 (助)長野県埋蔵文化財センター

#### 1996年度

牛山 佳幸 信州大学教育学部  
斉藤 享治 埼玉大学教育学部  
辻本 崇夫 (助)パリノサーヴェイ  
矢田 勝 (助)静岡県埋蔵文化財調査研究所  
寺内 隆夫 (助)長野県埋蔵文化財センター  
福島 正樹 長野県立歴史館  
三上 岳彦 東京都立大学理学部

#### 1997年度

市川 隆之 (助)長野県埋蔵文化財センター  
井原今朝男 長野県立歴史館  
大塚 昌彦 渋川市教育委員会  
土屋 積 (助)長野県埋蔵文化財センター  
原田 和彦 松代藩文化施設管理事務所  
福島 正樹 長野県立歴史館

所属名は1995～97年度現在

### 【経過】

まず最初に研究代表者(平川南)より本研究の目的と方法について、以下のように提示し、全員の了承を得ることとした。

#### 研究目的と研究方法 (1995年9月20・21日 第1回研究会において確認)

これまでは人間と自然との交渉史は、特に人が集住し、周辺環境に大きな影響を与え、現象としても顕著なものを抽出できるフィールド—平安京や鎌倉、そして江戸などの大都市—を研究対象としてきた。本研究では、そうした従来の研究で着目されてこなかった前近代における地方豪族の支配拠点の形成過程の中で環境との関わりを大きな視点としたい。とくにくりかえされる大河の洪水、地震災害などに対する開発の形態の変化を文献史学・考古学・民俗学・歴史地理学・植物学・地質学など幅広い学問領域の協業により総合的に明らかにしてみたい。

そこで、上記の条件に適したフィールドとして、日本列島のほぼ中央に位置する長野県の善光寺平を選定した。その選択の事由は次のとおりである。

古墳時代の4世紀に早くも森將軍塚をはじめとする巨大な古墳がこの一帯に造成され、その後も屋代地区を中心として、古代の信濃国の中核的の地方拠点が形成され、中世以降、海津城・屋代城など、また中・近世における善光寺は信仰の中核を形成するに至っている。

その在地支配の拠点形成の最大要素は千曲川にあり、度重なる洪水にもかかわらず、終始千曲川に大きく依拠した。自然堤防上に拠点都市や集落が形成され、その千曲川の後背湿地を利用し、周辺の水田開発を大規模に実施し、更埴条里・川田条里・石川条里など数多くの条里遺構を現在に残している。

また、発掘調査では古代における数多くの地震災害が確認されており、さらに近世には善光寺大地震も起きている。屋代の雨宮地区に伝わる雨乞い神事も本研究にとって興味深いものがある。

この善光寺平一帯は、近年急激な開発行為に伴い、長野県埋蔵文化財センターをはじめ、関係機関によって発掘調査が実施され、多くの成果を得ている。さらに、地元研究者における積年の研究成果もめざましいものがある。

第1回研究会後、10月31日に平川が、長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター・長野県立歴史館などの地元関係機関に本研究目的・研究計画などを説明し、全面協力の快諾を得ることができた。これらの地元関係機関と共同して、上記の研究成果を十分に活用して、本研究を推進したい。

なお、上記のフィールドワークはあくまでも本研究における主たるフィールドを決定したものであり、各研究員においてそれぞれの分野の立場から、本研究テーマにアプローチするための独自のフィールド活動をそれぞれ推進することとした。

#### 【1995年度】

##### 〔経過〕

第1回研究会 9月20・21日 国立歴史民俗博物館

平川 南	「本研究に至るまでの経過」
全員	「これまでの研究と本研究で目指すこと」
全体討議	「本研究方針と研究方法の検討」
辻 誠一郎	「人間と自然の交渉史」

第2回研究会 12月9・10日 現地調査・長野県立歴史館

善光寺平南部現地調査

市川健夫	「善光寺平における自然と人間生活」
白居直之	「善光寺平における条里遺構」

第3回研究会 3月10・11日 国立歴史民俗博物館

高木勇夫	「盆地の条里地域と自然環境」
原田信男	「関東平野における中世の人工堤防型集落」
寺内隆夫	「屋代遺跡群の発掘調査成果」
平川 南	「屋代遺跡群と古代の信濃」

##### 〔成果〕

本研究は、当初よりその研究方法として、歴史時代（前近代）を時間軸に沿って見通すことと、重点的な地域設定を行い、より具体的に実証することを目指す、とした。そこで従来の研究で着目されてこなかった前近代における地方豪族の支配拠点の形成過程の中で、環境とのかかわりを考察することとして、長野県の善光寺平を選定した。善光寺平一帯は、古墳時代の4世紀以降、古代・

---

中世を通じて信濃国の中核的・地方拠点として位置した。しかも、その在地支配の拠点形成の最大要素は千曲川にあり、度重なる洪水にもかかわらず、終始、千曲川に大きく依拠し、その後背湿地を利用し、大規模な水田開発がその形態をかえながら展開している。1995年度は現地調査において、地形観察と条里遺構や洪水・噴砂などの災害の痕跡を発掘調査現場で実見し、なおかつ2回の研究会でその地形形成と災害開発の詳細な内容を把握し、本研究の大きな見通しを得ることができた。

【1996年度】

[経過]

第1回研究会 7月6・7日 国立歴史民俗博物館

- 南木陸彦 「屋代遺跡群の大型植物化石群—古代の大型植物化石の既報告との比較と課題」  
辻本崇夫 「屋代遺跡群・更埴条里遺跡の自然科学分析結果からみた善光寺平南部の古環境」  
小林忠雄 「兩宮の神事芸能について」  
全員 全体討議

第2回研究会 11月9・10日 現地調査・長野県立歴史館

- 善光寺～落合～大室古墳群～川田条里遺跡～地震観測所  
斉藤享治 「扇状地の地形形成と災害—善光寺平北部を例として」  
金原正明 「奈良盆地箸尾遺跡における環境変遷と災害・開発」  
福島正樹 「企画展「木簡が語る古代の信濃」解説」  
全員 全体討議

第3回研究会 3月8・9日 国立歴史民俗博物館

- 三上岳彦 「日本の小氷期」  
矢田 勝 「古代末～中世の開発期の静岡平野」  
牛山佳幸 「古代・中世における善光寺の歴史的位罫」  
林 謙作 「縄文時代の資源利用」

[成果]

1996年度は、善光寺平北部の現地調査を実施し、千曲川と犀川の合流地域周辺および浅川と裾花川の成す扇状地の地形形成と、古代～近世にかけての善光寺平周辺の遺跡分布の概況を知ることができた。2回の研究会を通じて、まず南部の屋代遺跡群と周辺遺跡の出土遺物についての自然科学分析に基づいて、奈良盆地など他地域の状況なども比較検討しながら、その古環境復原を行った。また北部については、扇状地の地形形成と善光寺地震の実態について大きな研究成果を得た。その結果、当初の計画にあげた洪水・地震などの災害の実態を具体的に把握することができ、さらに古環境復原の大きな要因となる気候変化についても新たな知見を得た。

---

【1997 年度】

[経過]

第 1 回研究会 7 月 18・19 日 国立歴史民俗博物館

『国立歴史民俗博物館研究報告』に関する打ち合わせ

義江彰夫 「屋代地区現地調査の成果」

土屋 積 「善光寺平における古墳」

井原今朝男 「中世における善光寺平一帯の開発」

第 2 回研究会 10 月 25 日 国立歴史民俗博物館

原田和彦 「寛保の洪水と松代藩の復興策」

北原糸子 「善光寺平地震」① 災害情報の歴史的特徴 ② 災害の地域的特徴

第 3 回研究会 ミニシンポジウム 12 月 23 日 長野県立歴史館

基調報告

市川隆之 「善光寺平南部の条里遺構」

井原今朝男 「続・中世における善光寺平一帯の開発」

南木睦彦 「屋代遺跡群の大型植物遺体の分析」

全員討論 「善光寺平における災害と開発」

第 4 回研究会 3 月 12 日 国立歴史民俗博物館

大塚昌彦 「日本のポンペイ—群馬県渋川市中筋遺跡・子持村黒井峯遺跡発掘調査報告」

福島正樹 「善光寺平条里遺構に関する報告」

『研究報告』刊行に向けて

[成果]

1997 年度は 1995・96 年度の 2 カ年にわたる善光寺平一帯のフィールドワークの実績を踏まえて、善光寺平南部では古代地方豪族の拠点形成、北部では中世～近世にかけての善光寺の寺院経営というそれぞれの歴史的視点から、河川の洪水や地震などの災害に対する開発の形態の変化を具体的に描くことができた。

いくつかの課題は残ったが、3 カ年にわたる善光寺平一帯のフィールドワークの成果について、これまでの外部報告者と共同研究員によるミニシンポジウムを実施した。その結果、前近代の地方社会において度重なる河川の氾濫や地震という災害に対して、地方豪族・寺社などがどのように開発形態を変えながら対応したかという点が明確になった。そのうえで、災害時のみではなく、日本歴史の中で日常時における人間と自然のかかわりについて、今後さらに研究を深める必要があることを認識した。

前近代という時代設定と重点的地域設定（長野県善光寺平地域）という研究方法は、日本歴史における環境と人間のかかわりを災害と開発を通じて実証するためには有効であったと評価する。た

---

だ、こうした研究方法は、地域関係機関の全面的な協力を得られたことにより一定の成果を得ることができた側面が大きい。問題点としては、重点的地域設定は3年間という限定された研究期間で実施する場合、従前からのフィールド調査実績が必要である。したがって研究組織全員が同一地域にかかわることは困難であり、他のフィールド調査も含めながら比較研究する姿勢が必要であるといえよう。

(国立歴史民俗博物館歴史研究部)